

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	池内 栄理香	指導教員 (主査)	原田 隆之

論文題目	大学生に対する問題飲酒の予防としてのブリーフインターベンション ——ランダム化比較試験による効果の検討——
------	--

本文概要

【問題と目的】

大学は、飲酒習慣の確立、維持が成されやすい時期である (National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism, 2015)。海外では、大学生に対する問題飲酒の予防として、Brief Intervention (BI) に効果が認められている。本研究では、日本の若者に対する飲酒期待尺度を作成した上で、大学生に対しランダム化比較試験を行い、BI による飲酒への期待変容効果について検討した。

【方法】

(1) 研究 1 (質問紙調査)

参加者：大学生 112 名

使用尺度：①日本語版 AEQ-AB (7 項目)、②日本語版 AUDIT (10 項目)

(2) 研究 2 (介入)

参加者：大学生 195 名

研究デザイン：くじ引きによる一重盲検法単純ランダム化デザイン

介入条件：①BI 群：作成したワークブックおよびスライド、②心理教育群 (対照群)：飲酒に関する VTR

【結果】

(1) 研究 1

①確認的因子分析の結果、適切な因子構造は抽出されなかった。②日本語版 AUDIT スコアとの相関分析では、中程度の正の相関が得られた。④項目全体の Cronbach の α 係数は、.78 を示していた。⑤1 回目の調査と再調査の間の日本語版 AEQ-AB スコアは、高い正の相関を示した。

(2) 研究 2

介入、測定時期を独立変数、日本語版 AEQ-AB スコアを従属変数とした 2 元配置分散分析を行った。その結果、両介入とも、一時的に飲酒への期待に有意な改善が見られたが、一週間後には改善効果が消失したことが示された。

【考察】

研究 1 では、日本語版 AEQ-AB に一定の信頼性と妥当性が確認された。そのため、今後日本語版 AEQ-AB が若年層のアルコールへの期待を測定する尺度、将来の飲酒行動を予測する尺度として活用できると考えられる。

研究 2 では、BI という、より短時間・効率的な介入の有効性が示唆された。介入効果が一時的であった理由としては、飲酒への期待が良い方向、悪い方向どちらにも変化しやすい状況依存的な認知要因であることが挙げられる。そのため今後は、若者の飲酒への期待において、プラス面の変化を持続させる取り組みを行う必要があるだろう。

【引用文献】

National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism. (2015). College Drinking.

Retrieved from <http://pubs.niaaa.nih.gov/publications/CollegeFactSheet/CollegeFactSheet.pdf> (October 15, 2015).